

# なぜ男子の性教育が必要なのか？

池谷壽夫

いけや ひさお  
了徳寺大学教員  
著書『セクシュアリティと性教育』、『〈教育〉からの離脱』、  
『ドイツにおける男子援助活動の研究』、『東ドイツ「性」教育史』、  
『男性問題から見る現代日本社会』（共編著）、  
『教科書にみる世界の性教育』（共編著）など

今日のネオリベ的保守主義下でのきわめて不十分な「ジェンダー平等法」のもとですら、進んできた一定の女性の社会的進出。これに対してさえ、一部の男性は不安や「権利の不当な剥奪感」（ギーザ二〇一九より）を抱き、男の方こそ損していると女性を攻撃したり、あるいは元氣な（と見える）女性にルサンチマンを抱いている。ジェンダー平等を教育のレベルでいっそう促進するためには、女子のみならずこうした男子自身を当事者としてジェンダー平等教育や性教育へと巻き込むことが必要

## 性的身体との否定的な出会い

今日、思春期男子は、性的身体に対して否定的に関わっている。まず性やセックスに対する否定的な見方が増えている。日本性教育協会編（二〇一九）によれば、性やセックスに対して否定的なイメージをもつ思春期の男女（とくに女子）が、第五回調査（一九九九年）以降第八回調査（二〇一七年）にかけて増えている。第八回調査では、例えば性が「きたない」「きたない」「どちらかといえばきたない」の合計）と思う男子が中学校で七二%（女子七七%）、高校で七一%（女子七八%）と、女子とほぼ同じ傾向を示している。

次に、女子の初経との否定的な出会いはわりと知られ、女子の初経教育も行われているのに、男子の精通との出会いはほとんど看過されている。すでに池谷（一九九三）は男子の精通との出会いの問題を指摘していたが、近年また、女子と同様肯定的なものではないことが明らかにされている（猪瀬二〇一〇、池谷他二〇一七）。

それだけではない。思春期男子は、①ペニスの大きさに関する悩み、②包茎の悩み、③マスターベーションに関する無知と悩みを抱えている。しかも、高校生の男女と

不可欠だ。だが日本の性教育は男子が抱く性的関心や性の課題にまったく応えていない（橋本・池谷・田代編二〇一八）。ここでは今日の思春期男子（二二〜一八歳）が固有に抱える性の課題を明らかにし、思春期男子性教育（以下、男子性教育）の必要性を提起したい（男子性教育ここでは「大人の専門家による男子グループを対象とした性教育」と狭義にとらえておく）。

もに性的ボディイメージ（容姿は女性の人生を左右する」「容姿は男性の人生を左右する」「スリムなのは女性にとって大切だ」「スリムなのは男性にとって大切だ」「胸が大きいことは女性にとって大切だ」「ペニスが大きいことは男性にとって大切だ」にとらわれており、そのとらわれは、①早期からセックスを含めた交際をすべきだという考え、②メディアを情報源としていること、③男性は家族を養うことができなければならないという考え、などと有意に関連している（茂木二〇一七）。

## 性知識の乏しさ

二つ目に男子は女子に比して、正確な性知識に乏しい。橋本他（二〇一一）では、①男女とも、誤答よりも「わからない」と回答する者が多く、②男子の正答率が女子と比べて有意に低い。③正答率が一〇〜二〇%の項目は、男子では「月経周期」「排卵」「帯下（おりも）」「卵子」など女性の生殖機能に関する項目や、「DV」「妊娠中絶」などの項目であるのに対して、女子では「精子」「卵子」「帯下（おりも）」「DV」などとなっている。このように、男子は女子よりも全体として性の知